

# 現代ウイグル語移動動詞の対照言語学的研究 —英語・日本語東京方言・日本語福岡方言・シベ満洲 語との対照を通して—<sup>1 2</sup>

西岡 いずみ

(九州大学大学院人文科学研究院)

キーワード：現代ウイグル語，対照言語学的研究，移動動詞，視点移動の制約

## 0. はじめに

本稿では，現代ウイグル語の「到達点指向動詞 (goal-oriented verb)」として *käl-*，「到達点非指向動詞 (non-goal-oriented verb)」として *bar-*<sup>3</sup> を取り上げ，移動動詞の使い分けについての観察を行う。

さらに，他の言語における移動動詞の使い分けと比較対照を行い，「視点移動の容易さ」という尺度から，現代ウイグル語が言語間でどのような位置に置かれるかを考察する。

## 1. 移動動詞の選択に関わる要素と条件

用例の具体的な考察の前に，移動動詞の選択に関わる要素と条件を示す。

---

<sup>1</sup> 本研究は文部科学省科学研究費補助金特定領域研究 (A)「満洲語口語の調査研究」(領域代表者 宮岡伯人，研究代表者 久保智之，課題番号 12039230.) の助成を受けて行われた。

また，本稿は *Languages of the North Pacific Rim. Vol.7* に Nishioka (2006) として掲載予定の拙稿の一部を日本語になおし、新たに他言語との対照分析を加えたものである。

<sup>2</sup> 現代ウイグル語は中華人民共和国新疆ウイグル自治区を中心に話されるチュルク系の言語である。

調査にあたっては，Sabit Rozi (沙比提・肉孜) 氏 (1933 年，中国新疆ウイグル自治区グルジャ (イーニン) 生まれ) に多くの時間を割いていただき，ウイグル語コンサルタントとしてご協力いただいた。この場をお借りして感謝申し上げます。

<sup>3</sup> *käl-* と *bar-* は，{a, ä} e / # (C) \_\_CV という音韻規則により，それぞれ *kel-*, *ber-* という異形態をもつ。ただし，*bar-* は例外的に *bar-imän*, *bar-am-siz* などのように変化しない場合がある。

(1) 移動動詞の選択に関わる要素

話し手

聞き手

行為者（到達点へ移動する人）

到達点（移動の終着地点）

出発点（移動の開始地点）

発話時（話し手が移動に関して発話する時）

移動時（行為者が到達点に向かって移動する時）

ホームベース（問題となる人が通常いる場所あるいは所属する場所（家，学校，職場など））

移動動詞の選択は上記の要素に関わる条件によって決定される．その条件として以下のようなものが考えられる．<sup>4</sup>

(2) 移動動詞の選択条件

条件 1: 発話時に話し手が到達点にいる．

条件 2: 移動時に話し手が到達点にいる．

条件 3: 到達点が話し手のホームベースである．

条件 4: 到達点が聞き手のホームベースである．

条件 5: 発話時に聞き手が到達点にいる．

条件 6: 移動時に聞き手が到達点にいる．

以下の節では，現代ウイグル語の *käl-* と *bar-* の選択において，これらの条件がどのように関わるかを示す．<sup>5</sup>

## 2. 現代ウイグル語の「到達点指向動詞」と「到達点非指向動詞」: *käl-* と *bar-*

### 2.1. *käl-* と *bar-* の分類

はじめに，*käl-* と *bar-* を Fillmore (1972) に従い分類する．

<sup>4</sup> 他言語の移動動詞の使い分けに関わる条件を参考に仮定した．

<sup>5</sup> 上記の条件の組み合わせを基にした状況に対応する発話例を作成し，コンサルタントの判断をもとめた．その判断結果を表にして，appendix として挙げた．

Fillmore (1972) は、英語の移動動詞 *come* と *go* について以下のような例を挙げ、*come* を Goal-oriented な動詞とし、*go* を Source-oriented であり、かつ orientation に関して neutral な動詞でもあるとする。

(3) He came home at midnight. (Fillmore 1972: 4)

(4) He went home at midnight. (Fillmore 1972: 4)

(5) He went from Vancouver to Hawaii last week. (Fillmore 1972: 4)

Fillmore (1972) によれば、Goal-oriented な動詞は出発点が文脈から分かるとみなされる場合に用いられ、Source-oriented な動詞は、到着点が文脈から分かるとみなされる場合に用いられる。そのため、Goal-oriented な動詞 (*come*) の場合、以下のような文法性の対立が見られる。

(6) Where did he come from? (Fillmore 1972: 5)

(7) \* Where did he come (to)? (Fillmore 1972: 5)

Source-oriented な動詞 (*go*) の場合にも、以下のような対立が見られる。

(8) Where did he go? (Fillmore 1972: 5)

(9) \*Where did he go from? (Fillmore 1972: 5)

また、orientation に関して neutral な動詞の場合には、(5) の例のように出発点、到達点とも明示されることになる。

ウイグル語の移動動詞の場合、(6)、(7) のような対立を示すのは *käl-* である。

(10) qayär-din käl-di?

どこ-ABL 来る-PAST.3.SG

「(彼 / 彼女 / それは) どこから来たの？」

(11) \*qayär-gä käl-di?

どこ-DAT 来る-PAST.3.SG

「(彼 / 彼女 / それは) どこへ来たの？」

一方, ウイグル語で(8), (9) のような対立を示すのは *bar-* である.

(12) qayär-gä bar-di?

どこ-DAT 行く-PAST.3.SG

「(彼 / 彼女 / それは) どこへ行ったの？」

(13) \*qayär-din bar-di?

どこ-ABL 行く-PAST.3.SG

「(彼 / 彼女 / それは) どこから行ったの？」

*bar-* はまた, 以下の例のように出発点と到達点を同時に示す文中に現れることもできる. これは orientation に関して neutral な動詞としての *go* と平行的であると言える.

(14) ürümçi-din xotän-gä bar-di.

ウルムチ-ABL ホータン-DAT 行く-PAST.3.SG

「(彼 / 彼女 / それは) ウルムチからホータンへ行った。」

以上の観察から, *käl-* は「到達点指向動詞」, *bar-* は「到達点非指向動詞」(Fillmore (1972) における Source-oriented な動詞と neutral な動詞を含む) とみなす.

以下の節においては, *käl-* と *bar-* を含む発話をさらに詳細に検討する.

## 2.2. *käl-* と *bar-* の選択<sup>6</sup>

### 2.2.1. 話し手が発話時に到達点にいる場合

以下はすべて発話時に話し手が到達点にいる状況での発話である。

#### (15) [3]<sup>7</sup> (話し手と聞き手は動物園にいる。)

ätä män bu yär-dä siz-ni saqla-p  
明日 私 この 場所-LOC あなた-ACC 待つ-CONV  
tur-imän siz sa'ät qanči-dä  
とどまる(ASPV)-PRES.1.SG あなた 時 いくつ-LOC  
kel-isiz?  
来る-PRES.2.SG

「明日私はここであなたを待っています。あなたは何時に来ますか。」

#### (16) [18] (話し手は動物園にいる。電話で聞き手を動物園に呼ぶ。)

hazir män haywanat bağçisi-da. siz-mu kel-iñ.  
今 私 動物園-LOC あなた-も 来る-IMPR.2.SG

「今私は動物園にいます。あなたも来て下さい。」

#### (17) [5] (話し手と聞き手は聞き手の家にいる。)

ätä bu yär-dä men-i saqla-p tur-uñ.  
明日 この 場所-LOC 私-ACC 待つ-CONV とどまる-IMPR.2.SG  
män iş-tin çüş-üp kel-äy.  
私 仕事-ABL 出る-CONV 来る-IMPR.1.SG

「明日ここで私を待っていてください。私は仕事が終わってから来ます。」

<sup>6</sup> 適格性の判断においては、*käl-* と *bar-* のどちらも使用可能であるといったようなゆれが見られるが、本稿ではどちらも同様に使用できるという判断以外は、? や ?? などの判定がつかない方の動詞が選択されたとみなす。例えば、<sup>2</sup>*käl-* / *bar-* や、*käl-* / <sup>2</sup>*bar-* などの場合、前者では *bar-*、後者では *käl-* が選択されたとみなす。

<sup>7</sup> 角括弧内の数字は appendix の角括弧内の数字に対応する。

(18) [9] (話し手と聞き手は動物園にいる。)

ätä män bu yär-gä käl-mäy-män.

明日 私 この 場所-DAT 来る-NEG-PRES.1.SG

siz käl-äm-siz?

あなた 来る-Q-PRES.2.SG

「明日私はここに来ません。あなたは来ますか。」

(15) と (16) は話し手が移動時に到達点にいる (とみなされる) 場合に発話されるものである。一方, (17) と (18) は話し手が移動時に到達点にいない (とみなされる) 場合に発話されるものである。移動時の話し手の位置は異なるが, (15) - (18) ではすべて *käl-* が用いられている。このことは, 「発話時に話し手が到達点にいる」という条件 1 がみたされれば, 「移動時に話し手が到達点にいる」という条件 2 が満たされるかどうかは *käl-* の選択に関与しなくなることを示している。さらに, (17) と (18) から, 条件 1 がみたされれば, 「到達点が話し手のホームベースである」という条件 3, 「到達点が聞き手のホームベースである」という条件 4, 「発話時に聞き手が到達点にいる」という条件 5, 「移動時に聞き手が到達点にいる」という条件 6 が満たされるかどうか, *käl-* の選択に関与しないことが観察される。条件 1 が満たされれば, 常に *käl-* が選択される, つまり, 条件 1 が満たされれば, 他の条件はすべて *käl-* の選択に関与しなくなるのである。これらの考察は以下のようにまとめられる。

(19)

発話時に話し手が到達点にいれば, 常に *käl-* が用いられる。

(条件 1 が満たされれば, 他の条件は *käl-* の選択に関与しない。)

### 2.2.2. 話し手が発話時に到達点にいない場合

話し手が発話時に到達点にいない (とみなされる) 場合, *käl-* / *bar-* の選択は移動時の話し手の位置によって決定される。以下の節においてそれぞれの場合について述べる。

#### 2.2.2.1. 話し手が移動時に到達点にいる場合

次の文は発話時に話し手が到達点にいない場合に発話されるものである。

(20) [33] (聞き手は動物園にいる．話し手は他の場所にいる．  
電話で．)

ätä män siz-ni u yär-dä saqla-p  
明日 私 あなた-ACC その場所-LOC 待つ-CONV  
tur-imän. siz sa'ät qanči-da kel-isiz  
とどまる-PRES.1.SG あなた 時 いくつ 来る-PRES.2.SG  
「明日私はあなたをそこで待っています．あなたは何時に来  
ますか .」

(21) [48] (話し手と聞き手はどちらも同じ場所(書店)にいる．)

ätä män siz-ni haywanat bağçisi-da saqla-p  
明日 私 あなた-ACC 動物園-LOC 待つ-CONV  
tur-imän. siz sa'ät qanči-da kel-isiz? /  
とどまる-PRES.1.SG あなた 時 いくつ-LOC 来る-PRES.2.SG /  
<sup>?</sup>bar-isiz?  
<sup>?</sup>行く-PRES.2.SG  
「明日動物園であなたを待っています．あなたは何時に来ま  
すか / <sup>?</sup>行きますか .」

(20) と (21) においては，*käl-* が選択されている．いずれの文も移動時に話し手が到達点にいる（とみなされる）場合に発話される．これらの文においては，「発話時に話し手が到達点にいる」という条件 1 は満たされていないが，「移動時に話し手が到達点にいる」という条件 2 は満たされている．さらに，(20) と (21) における到達点が「haywanat bağçisi (動物園)」であるということから，条件 2 が満たされれば，「到達点が話し手のホームベースである」という条件 3，「到達点が聞き手のホームベースである」という条件 4 は *käl-* の選択に関与しないことがわかる．(21) の発話場所(書店)と移動の到達点(動物園)が異なることから，「発話時に聞き手が到達点にいる」という条件 5 が満たされるかどうか，この場合の *käl-* の選択に関与しないことがわかる．また，(20) の移動時には話し手だけが到達点にいるとみなされているため，「移動時に聞き手が到達点にいる」という条件 6 も，条件 2 が満たされていれば，*käl-* の選択に関与しないことがわかる．これらは以下のようにまとめられる．

(22)

話し手が移動時に到達点にいる（とみなされる）場合，常に *käl-* が選択される．

（条件 1 が満たされなくとも，条件 2 が満たされれば，他の条件は *käl-* の選択に関与しない．）

#### 2.2.2.2. 話し手が移動時に到達点にいない場合

話し手が発話時にも移動時にも到達点にいない場合には，*bar-* の使用が好まれるようである．

(23) [38] (聞き手は自分自身の家にいる．電話で．)

ätä män iş-tin čüš-üp öy-iñiz-gä bar-imän.  
明日 私 仕事-ABL 出る-CONV 家-POS.2.SG-DAT 行く  
-PRES.1.SG

「明日私は仕事が終わった後，あなたの家に行きます。」

(24) [39] (聞き手は動物園にいる．電話で．)

ätä yänä haywanat bağčisi-da men-i saqla-p  
明日 また 動物園-LOC 私-ACC 待つ-CONV  
tur-uñ. män iş-tin čüš-üp  
とどまる-IMPR.2.SG 私 仕事-ABL 出る-CONV  
haywanat bağčisi-ğa ?\*kel-imän/bar-imän.  
動物園-DAT ?\*来る-PRES.1.SG / 行く-PRES.1.SG

「明日また動物園で私を待っていてください．私は仕事が終わった後，動物園に?\*来ます / 行きます。」

(25) [59] (話し手も聞き手も同じ場所（書店）にいる．)

ätä iş-tin čüš-üp billä öy-iñiz-gä  
明日 仕事-ABL 出る-CONV 一緒に 家-POS.2.SG-DAT  
?kel-äyli/bar-ayli.  
?来る-IMPR.1.PL / 行く-IMPR.1.PL

「明日仕事が終わった後，あなたの家に?来ましょう / 行きましょう。」

しかしながら，依然として *käl-* が優先的に用いられる状況も存在す



る .

(26) [37] (聞き手は話し手の家にいる . 話し手は自宅以外の場所にいる . 電話で .)

(bügün jiq iş-im bar. öy-gä qayt-ip  
今日 たくさん 仕事-POS.1.SG ある 家-DAT 帰る-CONV  
kel-äl-mäy-män. / ?bar-al-may-män.

来る-ABIL-NEG-PRES.1.SG / ?行く-ABIL-NEG-PRES.1.SG)

ätä yänä biz-niñ öy-dä men-i saqla-p  
明日 また 私たち-GEN 家-LOC 私-ACC 待つ-CONV

tur-uñ. män iş-tin çüş-üp öy-gä  
とどまる-IMPRT.2.SG 私 仕事-ABL 出る-CONV 家-DAT  
qayt-ip kel-imän / ?bar-imän.

帰る-CONV 来る-PRES.1.SG / ?行く-PRES.1.SG

「今日 , 私はたくさん仕事があります . 家に?来られません / ?  
行けません . 明日また私たちの家で私を待っていてください .  
仕事が終わった後 , 家に来ます / ?行きます .」

(27) [34] (聞き手は話し手の家にいる . 話し手は自宅以外の場所にいる . 電話で .)

ätä-mu män öy-dä yoq. siz öy-gä kel-ip  
あした-も 私 家-LOC いない あなた 家-DAT 来る-CONV  
aka-m bilän sözliş-iñ.

兄-POS.1.SG と 話す-IMPR.2.SG

「私は明日も家にいません .でも ,あなたは私たちの家に来て ,  
兄と話してください .」

(28) [43] (聞き手は話し手の家にいる . 話し手は自宅以外の場所にいる . 電話で .)

ätä iş-tin çüş-üp billä öy-gä (u yär-gä)  
明日 仕事-ABL 出る-CONV 一緒に 家-DAT (そこ-DAT)  
kel-äyli.

来る-IMPR.1.PL

「明日仕事が終わった後 ,一緒に私の家(そこ)に来ましょう .」

(29)[49] (話し手も聞き手も同じ場所(書店)にいる.)

ätä biz-niñ öy-gä kel-iñ / <sup>?</sup>ber-iñ.

明日 私たち-GEN 家-DAT 来る-IMPR.2.SG / ?行く-IMPR.2.SG

(män öy-dä yoq.) aka-m siz-ni saqla-p

(私 家-LOC いない) 兄-POS.1.SG あなた-ACC 待つ-CONV

tur-idu.

とどまる-PRES.3.SG

「明日我が家に来て / ?行ってください。(私は家にいませんが) 兄があなたを待っています。」

*käl-* が用いられる (26) - (29) に共通するのは、到達点が話し手のホームベースであるという点である。これは *bar-* が用いられる (23) - (25) には見られない点である。このことから、到達点が話し手のホームベースである場合、*käl-* が選択されうるということが言える。ただし、以下の文 (30) - (32) では、*käl-* が優先的に用いられたり、どちらでも選択可能であったり、あるいは *bar-* が優先的に用いられたりするなど、判断がゆれている。

(30)[49] (話し手も聞き手も同じ場所(書店)にいる.)

ätä män öy-gä sa'ät 6-dä qayt-ip kel-imän

明日 私 家-DAT 時 6-LOC 帰る-CONV 来る-PRES.1.SG

/<sup>?</sup>bar-imän. (biz-niñ) öy-dä men-i saqla-p

/ 行く-PRES.1.SG (私たち-GEN) 家-LOC 私-ACC 待つ-CONV

tur-uñ.

stay(ASPV)-IMPR.2.SG

「明日私は6時に家に帰ってきます / 行きます。(私たちの) 家で私を待っていてください。」

(31)[55] (話し手も聞き手も同じ場所(書店)にいる.)

ätä män öy-gä qayt-ip kel-ip / ber-ip

明日 私 家-DAT 帰る-CONV 来る-CONV / 行く-CONV

siz-gä telefon ber-imän.

あなた-DAT 電話 与える-PRES.1.SG

「明日家に来て / 行ってからあなたに電話します。」

(32)[58] (話し手も聞き手も同じ場所(書店)にいる.)

ätä iş-tin čüš-üp billä (biz-niñ) öy-gä  
明日 仕事-ABL 出る-CONV 一緒に (私たち-GEN) 家-DAT  
kel-äyli / bar-ayli.  
来る-IMPR.1.PL / 行く-IMPR.1.PL

「明日仕事が終わった後，一緒に(私たちの)家に来ましよう / 行きましよう。」

これらの例は，到達点が話し手のホームベースであることが，必ずしも *käl-* 選択に結びつかないことを示していると言えよう．この観察は以下のようにまとめられる．

(33)

話し手がいかなる時にも到達点にいない場合，*bar-* の使用が好まれるが，到達点が話し手のホームベースである場合，*käl-* の選択も可能である．

(条件 1 と条件 2 が満たされなくとも，条件 3 が満たされる場合 *käl-* の選択も可能である．)

さらに，以下の文は到達点が話し手のホームベースでなく，かつ話し手がいかなる時にも到達点にいない場合でも，*käl-* の使用が可能であることを示している．

(34)[35] (聞き手は自分自身の家にいる．電話で.)

ätä sa'ät qanči-da öy-iñiz-gä qayt-ip  
明日 時 いくつ-LOC 家-POS.2.SG-DAT 帰る-CON  
kel-isiz?  
来る-PRES.2.SG

「明日あなたは何時に家に帰って来ますか。」

(35) [50] (話し手も聞き手も同じ場所(書店)にいる.)

ätä iş-tin çüš-kän-din keyin öy-gä qayt-ip  
明日 仕事-ABL 出る-PART-ABL 後 家-DAT 帰る-CONV

kel-ip /<sup>?</sup>ber-ip mañ-a telefon ber-iñ.

来る-CONV / ?行く-CONV 私-DAT 電話 与える-IMPR.2.SG

「明日仕事が終わって家に来た / ?行った後, 私に電話をください。」

(34) と (35) においては, 話し手がいかなる時も到達点におらず, かつ到達点が話し手のホームベースでないにもかかわらず, *käl-* の使用が可能である。これらの文に共通するのは, 到達点が聞き手のホームベースである点である。もし聞き手のホームベースが *käl-* 選択に関わる要因でないとすると, (34) - (35) と (36) - (37) との間の違いも説明が困難になるであろう。

(36) [36] (聞き手は動物園にいる。電話で.)

ätä män kino-ğa bar-imän. häsän

明日 私 映画-DAT 行く-PR.1.SG ヘセン

haywanat bağčisi-ğa bar-idu. siz ätä-mu u yär-gä

動物園-DAT 行く-PR.3.SG あなた 明日-も その 場所-DAT

(haywanat bağčisi-ğa) bar-am-siz?

(動物園-DAT) 行く-Q-PR.2.SG

「明日私は映画に行きます。ヘセンは動物園に行きます。あなたは明日もまたそこ(動物園)に行きますか。」

(37) [54] (話し手も聞き手も同じ場所(書店)にいる.)

ätä män sa'ät 4-tä haywanat bağčisi-ğa <sup>?</sup>kel-imän /

明日 私 時 4-LOC 動物園-DAT <sup>?</sup>来る-PRES.1.SG

/

bar-imän. haywanat bağčisi-da men-i saqla-p

行く-PRES.1.SG 動物園-LOC 私-ACC 待つ-CONV

tur-uñ.

とどまる(ASPV)-IMPR.2.SG

「明日私は4時に動物園へ<sup>?</sup>来ます / 行きます。動物園で私を待っていてください。」

(34) と (36) は発話時に聞き手が到達点にいる点で共通性を示しており, (35) と (37) は聞き手が発話時に到達点にいない点で共通性を示している. それにも関わらず, それぞれ対の発話に関する判断は異なっている. すなわち, (34) と (35) においては *käl-*, (36) と (37) においては *bar-* が用いられている. このことは, (34) - (37) における動詞の選択に関わる要因が, 到達点がどこであるかという点であることを示している. すなわち, 「到達点が聞き手のホームベースである」という条件 4 が満たされているために, *käl-* の使用が可能であるということが出来る. しかし, 到達点が聞き手のホームベースである場合にも, *käl-* が選択されない場合も存在する.

(38)[41] (聞き手は聞き手の家にいる. 電話で.)

ätä siz öy-iñiz-dä bol-mi-siñiz-mu,  
 明日 あなた 家-POS.2.SG-LOC いる-NEG-COND.2.SG-も  
 män öy-iñiz-gä ber-ip dadi-ñiz bilän sözliş-äy.  
 私 家-POS.2.SG-DAT 行く-CONV 父-POS.2.SG と 話す-IMPR.1.SG  
 「明日あなたが家にいなくても, 私はあなたの家に行って,  
 お父さんと話します .」

(39)[59] (話し手も聞き手も書店にいる.)

ätä iş-tin çüš-üp billä öy-iñiz-gä  
 明日 仕事-ABL 去る-CONV 一緒に 家-POS.2.SG-DAT  
 bar-ayli.  
 行く-IMPR.1.PL  
 「明日仕事が終わってから, 一緒にあなたの家に行きましょう .」

これらの例から, 「到達点が聞き手のホームベースである」という条件 4 が *käl-* の選択要因となる可能性があることはわかるが, 条件 5 や条件 6 より決定的に優先順位が高いと決定づけることはできない.

### 2.3. まとめ

ここまでの観察の結果をまとめ, 再度以下に示す.

(40) 現代ウイグル語の移動動詞の使い分け規則

- a. 発話時に話し手が到達点にいれば,常に *käl-* が用いられる。(条件 1 が満たされれば,他の条件は *käl-* の選択に関与しなくなる.)
- b. 話し手が移動時に到達点にいる(とみなされる)場合,常に *käl-* が選択される。(条件 1 が満たされなくとも,条件 2 が満たされれば,他の条件は *käl-* の選択に関与しない.)
- c. 話し手がいかなる時にも到達点にいない場合, *bar-* の使用が好まれるが,到達点が発話手のホームベースである場合,*käl-* の選択も可能である。(条件 1 と条件 2 が満たされなくとも,条件 3 が満たされる場合 *käl-* の選択も可能である.)

図にすると,それぞれの条件が以下のように階層をなしていることがわかる.

(41) 現代ウイグル語の移動動詞の使い分けとその条件

1) 話し手が 発話時に 到達点に いる	話し手が発話時に到達点にいない(1)以外)					
	2) 話し手が 移動時に 到達点に いる.	話し手が移動時に到達点にいない(2)以外)				
		3) 到達点 が発話 手のホ ームベ ース	到達点が発話手のホームベースではない (3)以外)			
			4) 到達点 が発話 手のホ ームベ ース	5) 聞き手 が発話 時に到 達点 にいる	6) 聞き手 が移動 時に到 達点 にいる	(4), 5), 6) 以 外)
<i>käl-</i>	<i>käl-</i>	<i>käl-/bar-</i>	<i>bar-</i>	<i>bar-</i>	<i>bar-</i>	<i>bar-</i>

話し手が発話時に到達点にいること(条件 1)が, *käl-* 使用の最上位の条件となり,その条件が満たされない場合,話し手が移動時に到達点にいること(条件 2)が,次に上位に来る条件となっている.いずれの条件も満たされない場合,次に上位に来るのは到達点が発話手のホームベース(条件 3)であるという条件である.この条件が満たさ

れば、*käl-* 使用が可能であるが、この辺りから *bar-* の使用も見られる。さらに、条件 3 が満たされない場合には主に *bar-* が使用されるが、部分的に到達点が聞き手のホームベースである場合（条件 4）に、*käl-* が用いられることもある。このことから、条件 4 が現代ウイグル語の移動動詞 *käl-* と *bar-* の選択に関与する可能性があることはわかるが、条件 5 や条件 6 との間の優先順位を決定づけることはできない。

### 3. 考察： 他言語との対照

以下の節では、現代ウイグル語の移動動詞 *käl-* と *bar-* の使い分けを、他の言語における移動動詞の使い分けと対照させてみたい。

ここで対象とするのは、英語、日本語東京方言、日本語福岡方言、シベ満洲語である。各言語を、以下にあげる条件の組み合わせによって、順に観察する。

【状況 1】話し手が発話時に到達点にいないが、移動時に到達点にいる（いた）。

【状況 2】発話時にも移動時にも話し手が到達点にいない（いなかった）が、到達点が話し手のホームベースである。

【状況 3】発話時にも移動時にも話し手は到達点におらず、かつ到達点が話し手のホームベースではないが、発話時と到着時に聞き手が到達点にいる（とみなしている）。

【状況 4】発話時にも移動時にも話し手は到達点におらず、かつ到達点が話し手のホームベースではない。さらに発話時に聞き手は到達点にいないが、移動時には聞き手が到達点にいる（とみなしている）。

【状況 5】話し手、聞き手ともに発話時にも移動時にも到達点にいない（いなかった）が、到達点が聞き手のホームベースである。

#### 3.1. 英語の移動動詞の選択

英語の移動動詞の使い分けに関しては Fillmore (1972) や、大江 (1975) を参照する。<sup>8</sup>

---

<sup>8</sup> 先行研究にない例文については、Jennifer Smith 氏（ノースカロライナ大学、

- (42) 【状況 1】 He came there yesterday. (大江 1975: 17)
- (43) 【状況 2】 Fred came to my apartment twice last week while I was gone. (Fillmore 1972: 10)
- (44) 【状況 3】 John will come / go there at 6 this evening. (大江 1975: 19)
- (45) 【状況 4】 I will come/ go there tomorrow. (cf. 大江 1975: 17)
- (46) 【状況 4】 John will come/ go to the department tomorrow. (cf. Fillmore 1972: 7)
- (47) 【状況 5】 I came/ went over to your house last night, but you weren't home. (cf. Fillmore 1972: 10)

以上をまとめると、英語では【状況 1】から【状況 5】までの全てにおいて come の使用が可能であると言える。

### 3.2. 日本語東京方言の移動動詞の選択

日本語（東京方言）の移動動詞の使い分けについては、大江(1975)と久野 (1978) を参照しつつ観察する。<sup>9</sup>

- (48) 【状況 1】 太郎八毎日ココカラ歩イテ学校ニ来ルラシイ。  
(久野 (1978: 255))
- (49) 【状況 2】 山田さんがきのう私の家に来ましたが、あい

---

アメリカ・Vermont 州出身) に文法判断をしていただいた。この場を借りて、ご協力に感謝申し上げます。

<sup>9</sup> 大江 (1975) と久野 (1978) においてコンテキストが明瞭でないものについては、筆者がコンテキストを設定し、東京方言話者の松浦年男氏 (九州大学言語学講座大学院生) に判断してもらった。この場を借りて、ご協力に感謝いたします。



にくその時私は外出していました。(大江 (1975: 40))

(50) 【状況 3】 あした そちら に \*来ます / 行きます。(大江 (1975: 18))

(51) 【状況 4】 あした山田さんが きみのうち に \*来ます / 行きます。(大江 (1975: 40, 41))

(52) 【状況 5】 昨日 きみの家 に \*来た / 行ったけど、君はいなかったね。

上記の例から、日本語東京方言において「来る」の使用が可能なのは【状況 1】と【状況 2】のみであることが観察される。

### 3.3. 日本語福岡方言の移動動詞の選択

大里 (1983) などに記述されているように、日本語の中でも九州方言のかなりの範囲においては、移動動詞の使い分けに関して東京方言とは異なる部分があるようである。

ここでは、筆者自身の内省による判断を基に、福岡方言の移動動詞の使い分けを観察する。

(53) 【状況 1】 太郎は毎日ここから歩いて 学校 に 来るらしい。

(54) 【状況 2】 山田さんがきのう 私んち に 来たけど、あいにくその時私外出しとった(っちゃんね)。[山田さんがきのう私の家に来たけれど、あいにくその時私は外出していた(んだよね).]

(55) 【状況 3】 あした そっち に 来る / 行くけん。[あしたそちらに来る / 行くから.]

(56) 【状況 4】 あした山田さんが あんたんち に 来る / 行くけん。[あした山田さんがあなたの家に来る / 行くから.]

(57) 【状況 5】 昨日 あんたんち に \*来た / 行ったけど、あんた

おらんかったね． [昨日あなたの家に来た / 行ったけれど，あなたはいなかったね．]

上記の例から，日本語福岡方言では，東京方言と異なり，【状況 3】と【状況 4】において「行く」に加えて「来る」の使用が可能であることがわかる．この点において英語と同じであるが，【状況 5】において「来る」の使用が不可能である点において英語との相違が見られる．

#### 3.4. シベ満洲語の移動動詞の選択

シベ満洲語は現代ウイグル語と同じく，中国新疆ウイグル自治区で話されている満洲・ツングース系の言語である．シベ満洲語の移動動詞 *gene-*（到達点非指向動詞）と *ji-*（到達点指向動詞）の使い分けについては，Kubo (1997) の記述がある．以下にその原理を示す．<sup>10</sup>

(58) Principle (revised): When the Speaker is at the Goal at Utterance time, *ji-* is used. Otherwise, *gene-* is used. (Kubo (1997: 21))

この原理に従えば，シベ満洲語では【状況 1】から【状況 5】の全てにおいて到達点非指向動詞 *gene-* が用いられることになる．例えば，以下は【状況 1】における発話であるが，移動時に話し手が到達点におり，また到達点が話し手の自宅であるにも関わらず，到達点非指向動詞 *gene-* が用いられている．

(59) (not at home)

---

<sup>10</sup> 早田 (1995) は，満洲語文語の移動動詞 *gene-* と *ji-* の使い分けについて，『満文金瓶梅』を資料として観察を行っている．その使い分けは，シベ満洲語の移動動詞の使い分けとほぼ同様である．以下にその引用を示す．

「発話者の発話時点の位置を『ここ』とすれば，『ここ』から遠ざかる動作は，その動作の行われるときに発話者が到着点に居ても，すべて *gene-*, *-ne-* ~ *-na-* ~ *-no-* 行く であり，「ここ」に接近する動作は発話者が動作時に動作の出発点にいてもすべて *ji-*, *-n-ji-* 来る である．これは少なくとも『満文金瓶梅』においては非常に徹底していると言える．」(早田 1995: 197)

cixse      mon-i                      haheji    xene  
 yesterday we(EXCL)-GEN    son      very  
 sita-me                              bo-ci              bedere-me  
 [be late]-CONV(IMP)    house-DIR    return-CONV(IMP)  
gene-xei.  
 go-FIN(PF)  
 “Yesterday our son came home very late.”              (Kubo 1997: 21)

(60) (not at home)

si    cimare      mon-i              bo-de  
 you    tomorrow    we(EXCL)-GEN    house-DAT  
gene-me-na ?  
 go-FIN(IMP)-YNQ  
 “Are you coming to our house tomorrow?”              (Kubo 1997: 22)

シベ満洲語では，発話地点からの話し手の視点移動に関して非常に強い制約が働いているとみることができる。

### 3.5. 視点移動の制約

ここまで，英語，日本語福岡方言，日本語東京方言，現代ウイグル語，シベ満洲語の移動動詞の使い分けを観察してきた。その結果は以下のようにまとめることが可能である。

(61)

	1)	話し手が発話時に到達点にいない (1) 以外)					
	話し手が発話時に到達点にいる	2)	話し手が移動時に到達点にいない (2) 以外)				
		話し手が移動時に到達点にいる.	3)	到達点が話し手のホームベースではない (3) 以外)			
			話し手のホームベース	4)	聞き手が発話時に到達点にいない (4) 以外)		
				聞き手が移動時に到達点にいる	5)	聞き手が移動時に到達点にいない (5) 以外)	
					6)	到達点が聞き手のホームベース	到達点が聞き手のホームベースではない
英語	come	come	come	come /go	come /go	come /go	go
日本語 福岡方言	来る	来る	来る /行く	来る /行く	来る /行く	行く	行く
日本語 東京方言	来る	来る	来る /行く	行く	行く	行く	行く
現代ウイグル語	käl-	käl-	käl- /bar-	bar-	bar-	bar-	bar-
シベ満洲語	ji-	gene-	gene-	gene-	gene-	gene-	gene-

この表からは、移動動詞の選択に関わる条件の階層は言語間であまり相違がないということが言えるかもしれない。確かに、言語によって、到達点非指向動詞(*go* 等に対応)の使用範囲が、到達点指向動詞(*come* 等に対応)の使用範囲よりも、広くなればなるほど、動詞の選択に関与する条件が少なくなるため、選択に関与しない条件間の階層を仮定することに意義を見出すことは困難となる。しかし、普遍的にこのような条件の階層があると仮定することができれば、各個別言語のレキ

シコンにおいて、到達点指向動詞と到達点非指向動詞の語彙情報として、それぞれ「話し手の視点に向かう移動を示す」、「話し手の視点以外の地点に向かう移動を示す」という情報のみが記載してあると考えることができる。そして、移動動詞の選択における言語間の異同は「発話地点から到達点への視点移動の制約の厳しさ」の違いから導き出されることが可能である。

以上のような仮定から、「発話地点から到達点への視点移動の制約の厳しさ」を尺度とすると、現代ウイグル語は本稿で比較対照した言語間において、以下のように位置付けることが可能である。

(62) 移動動詞の選択に関わる発話地点から到達点への視点移動の容易さ

英語 > 日本語福岡方言 > 日本語東京方言, 現代ウイグル語 > シベ満洲語

現代ウイグル語は、移動動詞の選択に関して、英語ほど視点移動が容易ではないが、シベ満洲語ほど困難ではなく、日本語東京方言と同じ位置に位置付けられる。

#### 4. 今後の課題

本稿では、現代ウイグル語の移動動詞 *käl-* と *bar-* の使い分けを観察し、さらに「発話地点から到達点への視点移動の制約の厳しさ」という尺度を基に現代ウイグル語といくつかの言語の移動動詞の使い分けとの対照を行ったが、現代ウイグル語やシベ満洲語と同地域で話され、現在最も勢力を持つと考えられる漢語との対照を行わなかった。Kubo (1997) は、シベ満洲語のコンサルタントがウイグル語も漢語も移動動詞の使い分けに関しては、シベ満洲語と同じであると述べていることを報告している。しかし、本稿で示した通り、少なくとも現代ウイグル語とシベ満洲語の移動動詞の使い分けはかなり異なっている。漢語の移動動詞の使い分けを観察し、現代ウイグル語やシベ満洲語と対照させることは言語接触研究の観点からも重要であると思われる。

今後、漢語を含め、さらに多くの言語のデータを収集し、それを統合する研究が必要である。その際、考慮すべきいくつかの問題がある。まず、1 つ目は、(61) に示した条件の階層が普遍的なものかどうか

という点である。<sup>11</sup> 2つ目は、なぜ「来る」が「行く」の領域をカバーできるのに、「行く」が「来る」の領域をカバーできないのかという問題である。言い換えると、話し手が発話時に到達点にいない場合に到達点に視点を移すことが可能であるのに対し、発話時に到達点にいる場合に到達点以外の地点に視点を移せないのはなぜかという問題である。観察対象をさらに、本稿において観察した以外の言語に広げることで、そのような言語が見つかる可能性もあるが、移動動詞の使い分けと、それに関わる視点移動のあり方を考える上で根本的な問題といえる。

いずれにせよ、今後さらに多くの言語における詳細な調査が必要である。多くの研究者間の連携・協力も必要となるが、言語と視点との関わりを考える上で意義のある研究と考える。

## 略語

---

<sup>11</sup> 本稿では 4) と 5) の条件の階層を表 (61) のように設定したが、査読者から、4) と 5) の間の階層性を示す言語が、本稿では観察されていないことが指摘された。これらの条件の間の階層性を決定づける言語データの研究も今後の課題である。

ABIL	ability	NEG	negation
ABL	ablative	PART	particle
ACC	accusative	PL	plural
ASPV	aspectual verb	POS	possessive
CONV	converb	PRES	present or future tense
DAT	dative	Q	question morpheme
GEN	genitive	SG	singular
IMPR	imperative	1/2/3	first/second/third person
LOC	locative		

### 参照文献

- Fillmore, Charles J. (1972) How to Know Whether You're Coming or Going. *Studies in Descriptive and Applied Linguistics* 5: 3-17.
- 早田輝洋 (1995) 「満洲語文語における『行く』と『来る』 『行く』と『来る』の使い分けの一例」『大東文化大学紀要』第33号.
- Kubo, Tomoyuki (1997) “Come” and “Go” in Sive Manchu. *Saksaha: A Review of Manchu Studies*. No.2: 19-24.
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』東京：大修館書店.
- Nishioka, Izumi. (刊行予定) Come and Go in Modern Uyghur. *Languages of the North Pacific Rim*. Vol.7, Endangered Languages of the Pacific Rim.
- 大江三郎 (1975) 『日英語の比較研究: 主観性をめぐって』東京：南雲堂.
- 大里泰弘 (1983) 「九州方言における『来る』について」『九大言語学研究室報告』第4号.

### Appendix: 現代ウイグル語の *käl-* と *bar-* の使い分け

(S: 話し手, H: 聞き手, A: 行為者, G: 到達点)

発話時 移動時		S と H が G にいる	S が G にい る	H が G にいる	S も H も G にい ない
		S が G にいる	G が S の家	[1] käl-	[16] käl-
	G が H の家	[2] käl-	[17] käl-	[32] käl-	[47]käl- / <sup>2</sup> bar-
H=A	G が上記以外 の場所	[3] käl-	[18] käl-	[33] käl-	[48]käl- / <sup>2</sup> bar-
S も H も G に いない	G が S の家	[7] käl-	[22] käl-	[34] käl-	[49]käl- / <sup>2</sup> bar-
	G が H の家	[8] käl-	[23] käl-	[35] käl-	[50]käl- / <sup>2</sup> bar-
H=A	G が上記以外 の場所	[9] käl-	[24] käl-	[36] bar-	[51] <sup>2</sup> käl- / bar-
H が G にいる	G が S の家	[4] käl-	[19] käl-	[37]käl- / <sup>2</sup> bar-	[52]käl- / <sup>2</sup> bar-
	G が H の家	[5] käl-	[20] käl-	[38] bar-	[53] bar-
S=A	G が上記以外 の場所	[6] käl-	[21] käl-	[39] <sup>2</sup> käl- / bar-	[54] <sup>2</sup> käl- / bar-
S も H も G に いない	G が S の家	[10] käl-	[25] käl-	[40] käl-	[55] käl- / bar-
	G が H の家	[11] käl-	[26] käl-	[41] bar-	[56] bar-
S = A	G が上記以外 の場所	[12] käl-	[27] käl-	[42] bar-	[57] bar-
S も H も G に いない	G が S の家	[13] käl-	[28] käl-	[43] käl-	[58] <sup>2</sup> käl- / bar-
	G が H の家	[14] käl-	[29] käl-	[44] bar-	[59] bar-
S, H = A	G が上記以外 の場所	[15] käl-	[30] käl-	[45] bar-	[60] bar-



**A contrastive study of the motion verbs of Modern Uyghur  
---compared with English, Tokyo Japanese, Fukuoka Japanese and  
Sive Manchu---**

Izumi Nishioka

(Kyushu University Faculty of Humanities)

There are a large number of researches on the uses of *goal-oriented* and *non-goal-oriented* verbs (corresponding to *come* and *go* in English) of world languages (e.g. Fillmore (1972), Kuno (1978), and Ohe (1975)). However, little is known about the uses of the goal-oriented and non-goal-oriented verbs in Modern Uyghur. I have researched the uses of *käl-* (goal-oriented verb) and *bar-* (non-goal-oriented verb) in Modern Uyghur. In this article, I will show the criteria for selection between these motion verbs in Modern Uyghur. Furthermore, I will contrast the criteria with those of other languages in accordance with “easiness of viewpoint shift.”